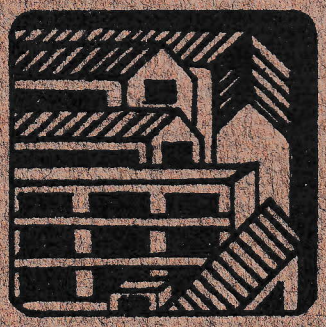
創立四十周年記念誌

昭和43年



小平市立小平第二小学校

目次

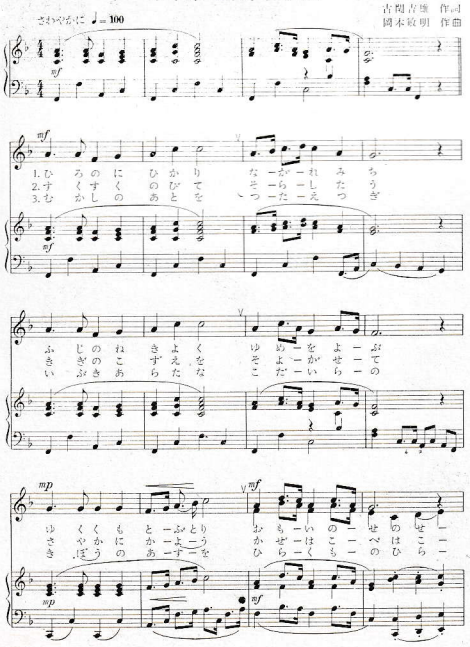
写真集 …… 3～7
式辞　学校長　大島祐市 …… 9
祝辞　小平市長　大島宇一 …… 12
　　市議会議長　荒井清太郎 …… 14
　　教育委員長　石井輝一 …… 16
歴代PTA会長寄稿 …… 19
歴代校長寄稿 …… 27
同窓会代表寄稿 …… 32
児童感想文 …… 35
沿革・年表 …… 45
PTAの歩み …… 50
あとがき …… 52

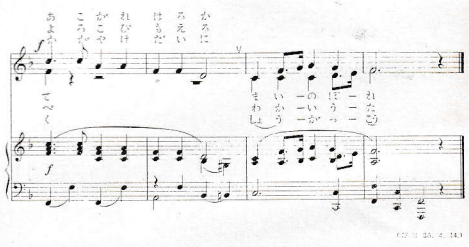
校　旗

（第十代）
現大島祐市校長

小平第二小学校校歌

古閑吉雄　作詞
岡本敏明　作曲





一、広野に光　流れ満ち
富士の稜清く　夢を呼ぶ
ゆく雲とぶ鳥　思いのせ
あこがれ遥か　舞いのぼれ

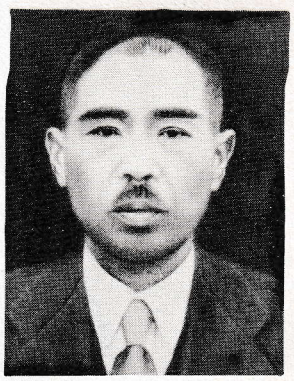
二、すくすく伸びて　空慕う
木々の木末を　そよがせて
さやかに通う　風、運べ
よろこび燃える　若い歌

三、むかしの跡を　つたえ継ぎ
息吹き新たな　小平の
希望のあすを　ひらくもの
かがやけ　第二小学校

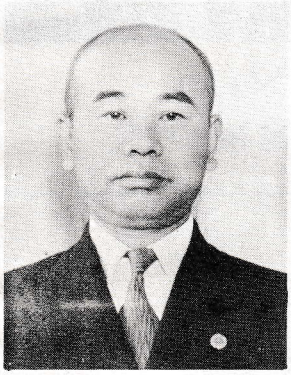
歴代校長

（第三代）
増尾次郎校長

（第二代）
茅根清次郎校長



（初　代）
瀧島晴吉校長



（第六代）
川口治男校長

（第五代）
柴山惣一校長

（第四代）
小口盛雄校長

（第九代）
椎名恵之亮校長

（第八代）
島田佳平校長

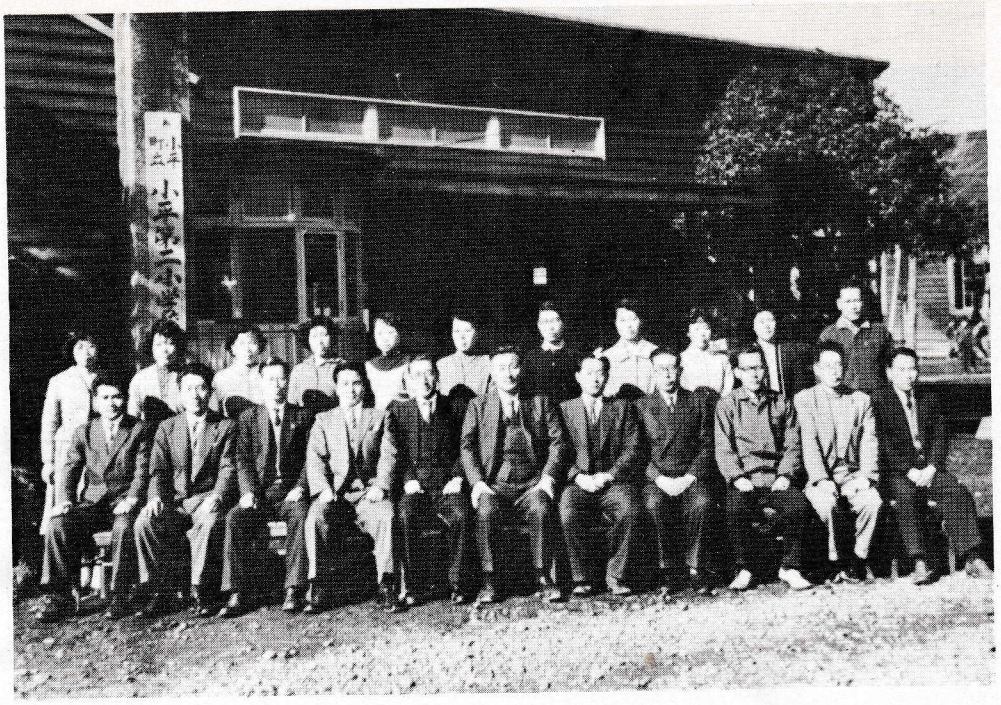
（第七代）
板東　茂校長

校　　舎

（開校当時）

青　年　会

（開校当時）



（昭和33年頃）

（昭和42年）

現　校　舎

（南棟全景）

歴史と伝統をふまえて

学校長　大島　祐市

本校が遠く明治のはじめに発足しながら、いく度かの変遷を経て地域住民の絶大な期待の中に現地に開校されたのは、今を去る四十年の昔　昭和四年の新春であった。昭和四年といえば第一回普通選挙が施行された丁度一年後であり、まだ大正デモクラシーの空気が多分に残っておったとはいうものの、当時の不況と相俟って漸く台頭しつゝあった軍国主義にとって代られる過渡期であった。私自身小学五年生であったので当時を思い起してみると、子供心にも農家の人々の不景気をなげく声を聞いてはいたが、まだ比較的自由主義の教育思想が残っており、のびのびと生活したように記憶している。然しそれから終戦までの約二十年は、満洲事変を契期として次々と拡大された戦争のため、多大の犠牲を払うこととなった。本校の第十回卒業生位までは、戦歿者も多く、同級会の折には、最初時間をきめて墓参を済ませ、然る後に会を開くという話も卒業生から聞いて、襟を正したものである。国民等しく一切を祖国に捧げた苦難の時代であったが、終局に近づくにつれ、極端な偏向と抑圧、思想の統制等息もつまる悲惨なものとなっていった。そして訓練と勤労奉仕と空襲におびえる毎日から解放される終戦の日を迎えた。その日を境に今までの長い統制と抑圧に対する反撥が一挙に吹き出し、これと占領政策とが重なって、急激な民主

化の時代に入り従来の思想、価値等一切の古いものを否定する風潮が強くなった。この時期の混迷、教育の困難は校舎その他の外的悪条件と相まって言語に絶するものがあった。本校歴代のPTAや当局の苦心も並々ならぬものがあったと思う。

爾来今日まで二十余年、国家より個人、精神より物質の思想、極端な自己主張や自由の行き過ぎ等静かに考えれば正常とは思われぬものも多い。教育の世界に於ても価値観の対立から生ずる様々の問題がある。然しながら如何に混乱があろうとも、歴史の法則には勝てない。明治以降の歴史を見ても凡そ二十年を周期として新旧思想の交代というか、時代の変化があったように思う。終戦の時は例外として、その交代も一挙に転換するというのでなく、徐々にではあるが底流として動いていたものが表面に出て新旧の交代とかその調和とかが、はかられるということを繰り返して動いてきたように思う。〃驕れる者は久しからず〃という平家物語の書き出しは、歴史の掟を語っているとも考えられる。行き過ぎに対しては当然その反撥が起り、一時に大きく右に傾き左に傾くことがあっても、次第にその振幅を少さくして、やがては正常な所へ落着くであろうし、又落着かせなくてはならない。こうした歴史の流れ、法則に基づいて現代を見つめ、将来を展望することが大切であり、四十周年記念式典の意義もそこにある。本誌の編集に当って、歴史年表を附して、これと対比しながら本校の沿革を綴ったのも、そうした意図によるものである。歴史を失ない伝統を忘れた民族は、もはや民族とは言えない。一国を滅ぼすには、その国の歴史を抹殺すれば足りると言われる。近代化してより百年、更に遡って二千年の歴史と数々の文化遺産を有する日本は、そう簡単に崩れるものではない。然しながらそのためには、これを受け継ぎ伝える

歴史教育が充実され、自国の歴史に愛情と誇りを、先人の偉業や労苦に感謝と畏敬の念を持つように教育される必要がある。世界いずれの国を問わず、すべて栄光に満ちた歴史がないと同じく、汚辱と失敗のみの歴史もないと思うが、どこの国でも自国の歴史は美しく誇るに足るものとして教えている。反省は必要だが徒らに卑下し卑屈になってはならない。意義ある今日の式典の日に、私は特にそのことを強調したい。長い歴史と伝統に培われた日本民族の良識を私は信頼する。開校以来四十年 幾多の苦難と 風雪に耐えて来た本校の歴史の力を信じている。時やよし、明治百年 開校四十周年の 記念すべきこの秋に、五千に及ぶ本校卒業生が同窓会を結成し、旧交をあたため、友情を深めて、母校の発展を祈念しその行末を見守ることとなった。誠に心強く、欣快の至りである。本校に職を奉ずる五十名の教職員、千二百有余の在校生は、いみじくも校歌に歌われた「歴史の跡を伝え継ぎ、息吹新たな小平の、希望の明日を開くもの」という言葉そのまゝに、伝承と創造の毎日を充実して送って欲しい。本日茲に市長をはじめ、歴代の校長、P・T・A会長、旧職員、同窓生、父母等多数の参列を得て、新装なった近代的な新校舎の披露も含めて、四十周年祝賀の式典を盛大に挙行出来ることは、開校以来の盛儀であり、校運隆昌の前兆ともいうべく、誠に感銘にたえないものがある。幾多の先輩同窓の方々や父母の方々が、学校に何を望むか、どうあって欲しいと願うか、人それぞれの思想を越えて良識の向う所、親心の趣く所は自づと定まるであろう。光輝ある歴史を有する本校第十代の校長として、私は謙虚に己れの良心に問い大方の向う所を察し、勇気と信念をもって経営に当り、健康な校風を樹立するため渾身の努力を傾ける決意である。 所信の一端を述べて式辞にかえる次第である。

祝　辞

小平市長　大島　宇一

小平第二小学校が、昭和四年、現在地に第二小平尋常高等小学校として設立されてから四十周年を迎えることとなった。この度、父母ならびに同窓会の諸君の賛同協力により、その発展を祝って、記念誌を発行するはこびとなったことは、ひとえに郷土を愛し、学校を愛する、まごころの現われであると思い、心からうれしく思うと同時に、誠に意義深い企画であると賛意を表する次第である。

記録によると、第二小学校は明治六年に創設された文よ、新よの二校を母体とした古い歴史をもっており、町村制、学制改革等、幾多の変遷を経て今日に至った、極めて由緒の深い学校である。現在地に開校した当時は、在校生四九〇名であったが、その後、六一九九名の卒業生を輩出している。近年、人口増により、五小・七小・九小を分離したが、現在、生徒数は一二六七名となって、来年はさらに第十四小学校を分離させねばならぬ発展ぶりである。この間、校長は第十代目を数えるのであるが、歴代校長を中心とする教師各位のしんしな訓とうと、父兄各位の熱心

な協力により、多くの有為な卒業生を送り出し、これらの卒業生が市内のいたるところに活躍していることは、喜こびにたえないところである。今日の小平市の異常な躍進の原動力が、これら卒業生の協力に負うところ絶大なのを思うとき、今さらながら、教育の効果の偉大さを痛感するとともに、関係各位の献身的な努力に心から敬意を表するものである。

小平市は三百年にわたる祖先の血と汗の結晶によって築かれてきたが、その底には不屈　不とうの開拓精神と純朴、誠実の上に育くまれてきた協調友和の精神が流れている。第二小学校においても、祖先から残された大切な伝統の上にたって、誠実、勤勉、努力、協調等を守り育てる、りっぱな校風がその誇りであると信じている。

どうか、関係各位が、なお一層の努力を賜わり、このりっぱな伝統と校風を守って、心身ともに健全な人づくりの実をあげていただきたいと心から願っている。

小平市立第二小学校
四十周年記念を祝して

小平市議会議長　荒井　清太郎

この度　市立小平第二小学校が、創立四十周年を迎えまして記念式典が盛大に催されますことは、誠に慶賀の至りでありまして、心からお祝い申し上げます。小平の教育振興の面からも喜びに耐えません。

小平第二小学校は第一小学校についで我が小平市では二番目に古い小学校でありまして、幾多の光輝ある伝統を誇る学校でもあります。歴代の校長先生をはじめ多くの教職員の方々の熱心なる教育活動と、父兄の方々の教育を愛する理解あるご協力によりまして、立派な校風のもと充実した高い教育がなされ、名実ともに立派な学校として成長し、発展してまいりました。幾多の変遷を経て本年四十周年の記念すべき年を迎えたわけでありますが、心から本校の発展のため御尽力下さいました各位に対して感謝と敬意を表するものであります。現在　学童数も　千二百六十余名を算し来年五月の開校を目標に分校設置も決定しておるような次第でありまして、その発展は驚くばかりであります。

ＰＴＡ会も創立以来歴代の会長さんを中心に立派な運営と活動がなされ、学校の発展、児童の教育向上のため多大な御協力がなされておりまして、心より感謝申し上げる次第であります。四十周年を迎えまして、今後益々第二小学校が充実発展なされますよう教職員の御精励と、ＰＴＡをはじめ関係各位の御協力並びに御指導を何卒お願い申し上げます。

四十周年記念に際しましてお祝いの言葉とさせていただきます。

四十周年を祝う

教育委員長　石井　輝一

明治百年の年、小平第二小学校が四十周年を迎え記念行事が行なわれる。まことにおめでたい極みで衷心からお祝いしたい。

第二小学校は、明治二十五年に現在の公民館分館の所に第二小平尋常小学校として設置され、昭和四年に現在地に新設併合されているから、七十五周年としてお祝いしたい気もする。

沿革については、小平町誌に詳述されているので、私が在学当時の第二小学校の様子を、思いだすまま紹介しよう。大正十一年に入学したときの校舎は、どこかの養蚕小屋だったと聞いたが、二階建ての古い建物で紙の障子であったから、雨の日などには、黒板の字が見えないほど暗かった。その校舎が間もなく改築されたのが、今の公民館分館である。三つの教室と職員室だけで六年生まで勉強したのだから、もち論複式であった。五年と六年は、学年別にしていたから、教室が不足し、職員室を教室に使い、先生は玄関の廊下につくえを並べていた。教室不足は、この頃でもあったのである。先生は、校長先生を含めて五名で、かたわらに校長先生の宿舎があって、

用務員も警備員も兼ねていた。児童の数は、私のクラスが男女で三十四名だったから、全校で二百名位だったろう。服装はカスリの着物で学ぼうをかぶり、儀式の時だけはかまを着けた。はき物は、ふだんはコマげた、雨天の時は、高足だで通学した。高学年になった頃は、ゴムぐつをはくようになって、通学が楽になった。げたばきの通学では、途中で緒が切れることがよくあったので、ひもをいつもカバンの中に用意していた。げたを片手に、はだしで登下校する姿も、その頃は珍しくなかった。

小平のめざましい発展につれ、第二小学校も次々と新しい枝を出し、子枝孫枝がすくすくと伸びてまた一本、今出そうとしている。この力強い今の姿を重ねてお祝いし、将来の限りない発展と、数多い卒業生各位のご多幸を祈ってやまない。

建設の労苦を思う

吉田　艸楽

小平第二小学校創立四十周年に当りお許しを頂き所感の一端を述べさせて頂きます。本校には立派な後援会があったのですが発展的解消により昭和二十五年にＰＴＡが発足したのです。終戦後の学制改革により六三制の義務教育となり学年の延長と人口の急増に伴ない教室の不足は甚だしく二部授業を行なう状態がつづいておりました。町当局も特に教室の不足の甚だしかった現在の第一中学校と第一小学校のために大和町にあった日立工場の建物を買い中ろうかの教室を造り、又第三小学校は元経理学校の武道場を払下げてもらい昭和二十四年度に増築し、翌年度第二小学校の増築をしたのです。当時は資材の入手困難なため建築業者は木材の提供がなければ請負を喜ばぬため当時の村野助役が静岡県まで出向き木材を買って来て南向の校舎二棟を新築したのです。現在一年生と若草学級に使用している校舎です。今では色々話題になっているかも知れないが当時としては一日も早く二部授業の廃止をと父兄は希望しておりその当時の町の財政としては教育優先で最善の努力をして頂いたのです。翌年は運動場の拡張の計画を立て町当局議会にお願いし百米直線コースの取れる面積の拡張の同意を頂きましたので地主さんにお願いしましたところ地主さんの並木覚次郎氏と吉田藤吉氏は創立以来拡張につぐ拡張と再三の事で大変御迷惑にもかゝわらず快よくお提供下され現在の様な広い運動場になったのです。整地にはＰＴＡの会員の方々が自発的に奉仕をして立派に完成しました。私は二年数ケ月余りの間当時の役員及び会員地区の方々の特別な御指導と御協力に対しては、今も深く感謝致しております。終りに本校の益々の御発展をお祈り申上げます。

四十周年によせて

大久保　泰一

今回当校に於いて創立四十周年記念行事が行なわれると承わり、なつかしさのあまり何か思い出の一言申述べて見たい

と思います。私は以前本校にお世話になりましたが何の仕事も出来ず　に赤面の至りであります。光陰は天の如くとか申すように、昭和始めに本校設立当時は小平町に小学三、中学一でそれでも結構まにあっておったわけです。それが今日小学校十三、中学四、それでも尚不足の状態とは実に小平市が急激に発展したもので誠におどろく外ありません。然し乍ら戦後発展の名にかくれて種々色々な事が出来ましてね現在社会の状勢を静かにながめたる時実に私は一人で心をうたれる思いがいたします。と云うのは文化人又は新人と云う者が戦前と比較してあまりにも変り過ぎて来た事です。平和の名にかくれて人心やゝもすれば馳緩して社会が暗くなったような気がするのです。人類間の信頼、親子の情愛の不足、公衆道徳の低下、数えれば沢山あります。私達は先づ以て日本人であり、又小平市民である事の自覚が必要であり、大和民族の血をうけた人類である事をわすれてはならないと思います。今日日本の為、小年教育に対して私は誠に残念至極と思うのです。いずれにしましても現小平市民は、お互に市のため時には国のため、共に協心力合、親睦和合、手を取り合って進むことが大切です。市発展のため市政に納税に又教育に通路画巾等に対しては積極的に協力をおしまず大小平市建設に前進しなければならないと確信するものですが、私は此の機会に全市民の賛同を得たいと存じます。

終りにのぞみ第二小学校始め各小、中学校並びにＰＴＡ発展を祈会すると共にその路に迷う事のないように当局や教育委員会等にも御願い致します。最後に第二小学校の万歳を唱えさせていたゞきましてつたない文章で赤面の至りですが私の感想を述べさせていただきました。意のある処を御くみとり下されば幸いに存じます。

創立四十周年を迎えて

福井幸次

わが子が五人とも学んだ第二小学校が創立四十年を迎える知らせを受けて今更に私の年輪を振りかえって見た。長女が通学するようになって二年后に弐十周年であった筈。文字通り田舎の学校で私共都内から移り住んだ者には、これではッと云う不安の種が数々あった、その反面広々とした運動場と、昨今のように車その他の騒音に神経をすりへらす事

なく子供達が伸び伸びとしていられた事は都内では得難い良さでもあった。

後援会からＰＴＡと変り私もその一員となって皆様と共に「子供達のために」をモットーとして活躍した。当時の町財政はまことに貧弱で、学校設備、備品類で新しく話題になるものはそのほとんどがＰＴＡ会費で支辯されたものである。

その当時都内から移り住まれた人達は一部理解者を除いて、学校の程度の低いことを口にされた、而しその学校を良くすることには残念ながら非協力的であった。それだけにＰＴＡの一員となり役員ともなれば早く充実させて都内並みに追いつこうという気持ちになったのである。勿論先生方も、教材の不足、備品の更改等を機会ある毎に訴えられたのである。

私がＰＴＡ会長をお引受けした時は学校の内容も幾らか良く成っていたが、年毎に増す児童数に教室の不足はどうする術もなく、公民館分館を教室に当ててその場をしのいだのである。このまゝでは到底二部授業はまぬがれぬ事を知り、分校設立の急を当局及び教育委員会に申し出た。「二部授業」は絶対にさけたいという父兄の強い意志が結集された二小分校（現第五小学校）が突貫工事で進められた。出来上ったとき花小金井地区の人達の顔の晴々しさ、思わず涙がこみ上げて来たものである。

分校が出来やがて独立するとなると当然にＰＴＡの構成も二つに分れる運命にある。備品の割、例えば図書をどのように分けるか、ＰＴＡ会費の残金をどのようにするか、我田に水を引きたいのは世の常で、会員の間にその強いものを感じ私は会長としてあくまで常識的にこれを解決しようと協力を求めた。幸いに私の意のあるところを理解していたゞき円満に分れたお蔭でその後も二小と五小のＰＴＡはお互に交流したものである。これ等も私にとって忘れ得ぬ出来事の一つである。

今のＰＴＡの方々がどのような考えを学校と子供達の上に持っておられるかは知る由もないが、第二小学校がより一層恵まれ、その庭で学ぶ児童達が幸せになるよう心から願う次第である。

鈴木　重雄

わが校が小平尋常高等小学校及び第二小学校の業をあわせ、ついで第二小平尋常高等小学校として当所に創立されたのは遠く昭和四年一月八日の事です。爾来星霜四十年もの間よく世運の盛衰と民族の苦渋とに堪え乍ら（五小、七小、九小）（昭和四十四年度二小分校）の母校として発展の一路を辿って参りました。創立四十周年に当り心から祝福申し上ます。昭和二十六年第一次七教室の増築三十一年二小分校創立（現五小）尚逐日増加する児童をうけ入れるには教室不足をどうすることも出来なくなりました。三十三年度は遂に再び二部授業を行なわなければならない状態に立ちいたり学校側ＰＴＡが一体となり、町当局に校舎増築の要請を日夜続けた結果、第二次の校舎増築が町議会の議決を得て迅速にすゝめられ本格的に着工され（当時は二階立校舎は第一小学校につぐ二番目）学校側初め児童父母の喜びは最大のものと今考えますと夢のような喜びでした。十二月竣工落成致し、新装晴れやかな二階立校舎の喜びと同時に、わが校が創立三十周年に当りますのでこれこそわれわれの喜びを本校の歴史と共に長く伝える有意気な事業の一端であると存じ、相謀して創立三十周年校舎増築落成記念準備委員会を結成し、教育資材整備充実に努力し、新校舎にふさわしい内容を整えて一層わが校教育の成果向上を願った次第です。この事業趣意には子弟の為にをモットーに全員御協力を得て小平町立学校では第二番目の（第一番目一中）山葉グランドピアノＧ３号一台、山葉オルガン二台を三十周年校舎増築記念として学校に寄附しました。当時の学校にたいするＰＴＡ会員の熱意協力は今もって想像もつかない様な努力でした。今日を考えると余りにも社会の変りようには、さびしさを感じ当時のことが本当になつかしくなります。教室が暗いので壁を白く塗装する先生と父兄、整備資金調達のため映画会、運動会のうどんのお汁の味、あの味は今もって忘れない楽しさであった。しかし反対に大変な心配もあった。なかでも「勤務評定」の問題、これは日本の教育にとっても大切なことでした。三十六年には私費負担に対する禁止条令が出て、以後大きくＰＴＡ活動に変革を来し、益々複雑な時代になり当時が全く懐しく思い出されます。

四十周年を迎えるに当り益々御発展をおいのりいたします。

私の思うこと

―四十周年によせて―

佐藤　英雄

鉄は熱い中に打て、冷えきってからでは遅過ぎる、人間も之と同じ事で人間形成に最も大切な時機は幼児期、児童期に於ける教育であるといっても過言ではないと考えます。

現在日本は敗戦の泥沼から立ち上り世界屈指の工業国として立ち直りつつあり、その民族的強靱さは世界の等しく驚異とする所であると思います。しかし振り返って国内事情を顧みます時之でよいとお考えの方がおありでしょうか。政治の腐敗はその極に達し利権の陰には必ず汚職が、国家民族の存亡につながる防衛問題にさえその暗い陰が常に付きまとうという社会の実態はどうでしょう。

民主主義国家として再生して以来国民の権利は大いに伸張し自由を謳歌する風は街に溢れ人間性豊かな社会生活が営なまれています。之は日本民族にとって未曾有の事であり、まことに喜ばしい事と言わざるを得ません。然しその反面個々の義務感は日毎薄れるばかり、為に至る所に対立抗争が続けられています。純真な学生が暴走したくなる気持もよく分る様に思われます。然し之も最近では社会秩序を破壊する様な暴挙に発展しつゝあり遺憾にたえない所です。

先づ大人が襟を正してその過ちを猛省すると共にその原因が奈辺にあるかを考えて見なければならない時機ではないかと思います。

敗戦以来堰を切って雪崩れ込んできた自由主義思想、これ等を消化しきれず薄っぺらな民主主義に酔っているとしか受けとれません。学生は師を彼等と呼び、子は年老いた親を扶養する義務さえ忘れようとしています。人間は知識と能力だけあればよいものでしょうか。礼儀を忘れた社会に真の秩序は生まれないのです。

二小の若いお母様方、大切な児童期の教育に携わる先生方、より良き社会人を育成する当面の大切な責務を負われる方々として御尽力あらん事を心よりお願いする次第です。

二小創立四十周年を祝し洋々たる二小の発展を祈念しつつこの稿を終りたいと思います。

第二期卒業生

岩淵　重蔵

小平市立第二小学校創立四十周年を御迎え致しまして誠に御目出度うございます。衷心より御祝い申し上げます。

初代校長故滝島晴吉先生を御迎えし、小平村立第二尋常高等小学校が誕生致しましてより、最早、四十年の歳月が過ぎました。私達同期生は昭和五年三月高等科第二学年男女合わせて六十余名第二期生として卒業したのです。私は昭和十二年より同二十一年迄外地満洲に勤務して居りましたので、よくわかりませんが、戦時中、国民学校に変わり、また終戦後六三制になり、只今の小平町立第二小学校となりました。昭和二十六年より三十七年迄十年余りＰＴＡ役員をしてまいりました。その間、皆さんも御承知の通り、市の発展に伴ない、人口増加、生徒の激増による校舎の増築、及び、分校の新設、随時独立校五校を第二小学校より分校されております。本校も現在では、敷地の関係と思いますが、鉄筋コンクリート三階建も出来ております。教室も各専科別教室もあり、昔を思うと夢のようです。四十周年記念に際し、現校長大島先生を中心として本校の益々発展されますよう、又優秀なる卒業生を沢山送り出されるよう御祈り申し上げます。

荒　武　進太郎

開校以来満四十年の長い伝統と歴史を持った小平第二小学校が記念誌を発刊されますことを心からお祝い申上げます。私は八代目のＰＴＡ会長だったそうですがわずか一年で卒業させて頂きましたので何等助役に立たずに終った次第です。此度学校から「何か思い出を」と申されますので私の記憶しておりますことを少しばかり書かせて頂きます。一番記憶に残っているのは給食施設のことで確か小平市で三校目ではなかったかと思われますがなかなか問題がありました。御承知

の通り脱脂粉乳の是非が父兄の中からも当然出て問題となり生牛乳をとの希望が出て来ました。生牛乳を呑ませるに越したことはありませんが給食費の問題又補助金等の関係で何回となく会合を開いたものでした。こうした空気の中からいよいよ給食施設が完成して火入式を行う段取りになりますと式の方法等をめぐり迷信的な話まで出てどうなることかと全く心痛致しました。しかしお蔭を持ちまして無事に給食が始まったのです。現在はどの様な空気になって居るか知りませんが子供達の為に少しでもより良い環境である学校として又明るい修学の場であります様先生方始め御父兄の方々に御協力頂きますことをお願い致します。一年一年学校、先生、父兄、子供のつながりが形式的なものになり血のかよわない冷たさを増して行く様に思われますが何故なのでしょうか？但し私一人の考えであれば幸いです。頭でっかちの子供だけは育成したくありません。歴史と伝統がいかに子供達の教育に大切なことかを私達は考え直してみたいものです。

以上たどたどしい思い出をかえり見て……

思い出

岡田久義

今から四十年前の小平は、新しく移住なされた方々には想像もつかない辺鄙な寒村であった。私達は小学三年生の時に今の二小に移って来た、転校ではなくて学校が越したのであった。それまでは今の一中の所に小学校があって、そこまで通よわねばならなかった。今の二小が出来た時分校の児童が来た。分校とは今の公民館分館であります。その当時の服装はと見れば皆、カスリの着物で洋服を着ている者など一人もいない。洋服なんて酒落た物を着る人は学校の先生か村長さん位のものとばかり思っていた、夏になると毎年のように東京から叔父さんが子供達を連れて避暑に来た、その子ども達が洋服を着ている、その姿を見るととても羨ましかった。東京の叔父さんの家は大尽なんだろう、俺もあんな大尽の家に生れてくればよかった、とつくづく思った。当時は子ども達が「僕」なぞいう言葉はつかわない皆「俺々」と言っていた。当時の第二小学校は畑の中の一軒家で、冬ともなれば校庭は霜柱が十センチ以上も立っていてとても校庭で遊ぶどころで

はなかった。霜が解けるまでには校舎の南側で日なたぼっこをしていた。又靴なぞという「ハイカラ」な履物なぞあろうはずもなく皆下駄であった。霜や雪の降る日には高下駄にカラ傘を差して「カバン」というものを肩から腰までぶら下げて、てくてくと通った。雪も今より余程よく降った。一冬には十センチ以上の大雪が五、六度降った。その中を高下駄を履き何度も何度も転び乍ら、泣き泣き学校へ通った。着物も足袋もぐしょぬれの時が間々あった。どうしてこんな思いまでして学校へ行かなければならないのだろう、と子ども心に時々考えた事もあった。

ある秋のことであった。朝学校へ行く時雨が降っていた。暴風雨になろうなぞとは今のように天気予報もないからわからない。帰りにこの暴風雨に会ってしまった。傘は忽ちとばされる、頭から足のさきまでずぶ濡れでようやくの思いで、我が家にたどり着いた。その頃の親は学校へ子どもを迎えに来るような家は一軒もいなかった。泣き乍ら家にたどり着けば家には恐い親父が待っていて「バカヤロ、雨に濡れたからといって溶けやしない、よく拭いて着替えろ、と頭からどなられた、其の頃の親父とは実に恐いもので、母なぞてんで口が出せなかった。真に関白の位があった。今の我々父親とは何と情けない存在であろうか。昔の頃をしみじみ思い出せば、あのように鍛えられたからこそ病気もせず丈夫で毎日を楽しくすごせるのだと思っている。思い出を綴れば、後から後から限りがない。竹のムチを持った先生も恐い、お巡りさんも恐いと限りがないからこのへんでペンを置く。

高橋　一雄

当校の創立四十周年の年に会長という回り合わせは、誠に身に余る名誉であるとともに無能がなる故に又人一倍責任の重大性に困惑しております。会長在任中の想い出という編集者からの注文でありましたが、或る意味で良き時代の最後のＰＴＡであった昭和三十九年の岡田会長時代のこと＝リクリェーションとしての油壺バス旅行、年に一度のバザー等、打ちとけた人間関係と学校のためという会員、さらにＯＢを含めてのひたむきな情熱があった＝　昭和四十、四十一年の吉

田会長時代のこと＝近代化という名の革新的な教育界の嵐にまきこまれ、規約の大改正がなされるとともにＰＴＡの場が理論の場と化し、ＰＴＡの運営に種々の困乱を生じた。吉田会長の生業をなげうっての努力の結果夢にまでみた鉄筋校舎が実現した＝等先代会長当時の事ばかりが想い出として残っている。ということは、四十二、三年度の会長は、何等の成果も挙げていないということになるが、誠にそのとおりであると思っています。四十二年度に於けるＰＴＡは、前年度に引き続き、公教育費問題、私費負担軽減ということで、二小独自のＰＴＡ活動に特に行われず、専ら、三多摩における一般公立学校の問題解決ということで諸活動が行われ、このため学校との協力関係は全く疎遠になるばかりであった。鉄筋校舎の第二期工事が完成したが、これは既定事業の一環として行われたものでＰＴＡとは関係の無いものであった。然し四十三年度に入り校長の交替とともに、新校長の学校とＰＴＡの協力関係による二小再建のあくなき情熱が二小ＰＴＡの沈滞を救いあげてくれました。本年度は、学校側の積極的な協力を得、父兄側も二小独自のＰＴＡ活動という意欲に燃え出してきたことは、此れ以上の喜びはないと思います。会の運営も良好な人間関係とともに積極的なものとなり、此の顕著な現れが秋の運動会における小平市初めての会員三二〇人の大デモンストレーション（クラス別対抗メディレンボール、一クラス父母十名づつ）となったものと思います。この気運を十一月の四十周年記念に更に拡大することができるならば二小ＰＴＡはその使命をほゞ果し得たものと確信してよいのではないかと思います。

昔語り

増尾次郎

小平第二国民学校長として、昭和十七年五月から昭和十八年十二月まで僅か一年八カ月の短かい期間ではあったがお世話になり、思い出も少くありません。初めての校長経験でもあり、三十代の野心にもえ、はたの者にさぞ迷惑をおかけしたことでしょう。

学校は「（かぎ型）で東側の道路に沿う築地（土は）の中程に二本の高い「みかげ石」の門柱があり、そこから入って

運動場を横ぎると正面玄関で事務室や教室が並び新しい校舎で、「かね」に曲った右の建物は古かった。

十年程前には学校の統廃合で、村をあげての大運動会であった学校だが、一昔後のこの頃は大変おだやかで、保護者の団体（振興会か？）の皆さんが学校のことは何でも聞き届けてくれるという協力振りでした。その頃の会長大竹さんをはじめ、弁内・両吉田・西海・肥沼・森田さんは今どうしていられますかしら。

学校のまわりは大方農地で、南へ六、七百米行くと陸軍経理学校があり、その東は陸軍の拡張地でした。農地に囲まれていた関係もあり、近所から麦の穂を折った、陸稲を踏んだ、芋を掘った、梅の実、栗を取ったと、苦情が舞いこむには閉口しました。戦時中の食糧の重要さが、まざまざ思い出されますし、教育の不徹底さが恥じられます。

その頃は修学旅行は禁ぜられ、戦勝祈願を兼ねた伊勢参宮のみが許されていました。昭和十八年六月高等科の児童を引卒して参宮旅行に出かけた。何日であったか大変に暑い日でした。参拝が終って二見の海岸で昼食をした。昼休みに白い砂にはらばっていた。何やら騒がしい声に立ち上って見れば、パンツ一枚になった十五、六人の男生が海に走りこもうとしている。とっさに砂を蹴立てて走り、まるで野獣のような蕃声を張り上げ、両手をひろげて、これをさえぎった。子供たちは驚きと不満で、許可したであろう男の先生の顔と、私の顔とを見くらべて当惑した。今は不惑のお父さん方で「うん俺たちだ」とおっしゃる方々が、おいでしょう。

おしまいに、私は十二月二十九日国分寺第一国民学校に転任辞令を受け、小口盛雄先生と、かわった。全く見識のない校長が元日の式をつとめるわけにも行かないので一月一日四方拝の式を終らせて、転任のことを話した。切り出す私もつらかったが先生も父兄も唖然とするばかりでした。

二小時代の思い出

小口盛雄

私が二小の前身、小平第二国民学校長として赴任したのは昭和十八年十二月の末で、大平洋戦争もいよいよ緊迫の度を

加えつつある時であった。当時公立学校は三校だったが高等科のあるのは、第一と第二だけだったので、第三の初等科卒業生も高等科は第二に通学していた。十九年の四月には高等科の生徒は戦力増強の名のもとに保谷の軍需工場や、近接の陸軍経理学校に動員されていき、学校には初等科だけが残されていた。間もなく十二教室の中、四教室は陸軍の通信隊の器材置場に転用され、軍人が駐留することになった。校庭の梧桐も次々に切り倒され、清水用務員の手によって次第に防空壕が作られていった。

空襲がはげしくなるにつれ、児童は警報発令と共に帰宅させたが、職員は残って校舎の警備や、書類の保全に万全を期していた。二十年四月、一年生の入学式は前夜投下された時限爆弾がさく裂する音を聞きながら、行なったもので、現在の児童には到底想像もできない事であり、又あってはならないことである。

幸い学校や動員先での事故はまぬがれたが、花小金井駅前の児童は自宅の防空壕で、家族と共に爆死するという痛ましい事故もあった。

二十年八月敗戦におしひしがれて虚脱した状態の中に赤痢が発生し、児童も三十数名が昭和病院に収容され、白井院長の献身的ご努力にも関らず数名の尊い児童の生命が失われていった事も忘れ得ない事柄である。又戦後の食糧難の時、教育振興会から格段のご援助を受けた暖い思い出も残されている。

平和国家、文化国家の建設という理想はかかげられたが、教科書も満足に与えられず、教材教具も乏しい中に、新教育への切り替えという重責が荷せられていった。まこと私の二小在職中は物心両面から苦悩の多い過度期であったといいたい。漸く人心も落ちつきかけた二十三年の九月東京都教育史上かってない校長の大異動が行われ、私は一小に転任を命ぜられた。

第二小学開校四十周年を迎えて、心からお喜びとお祝いを申上げます。

板東　茂

私は昭和四年十月から三年半お世話になりましたが、町の方々、父兄の皆様とも非常に親しい交際をさせていたゞき、学校間の交りも楽しく、真に有意義な経験であったと、感謝しております。

町内教師団の時廻り研究事業から、教員対抗バレー大会、小中聯合運動会等で教師対児童、生徒の人間関係も深まり、真の意味の、健康教育が、育っていたものと思います。

大磯の臨海学校開設もその現れです。町役場、教育委員会、昭和病院の方々も寝食を共にしてお世話下さいました。

二小が単独実施したのが、六年卒業旅行、日光中禅寺湖行で、当時これを実施するには、かなりの勇気と責任がいるので、無事終了した時には、ほんとに安心しました。当時の六年生担任及御父兄に感謝申し上げます。

学校の移転（現在の五小）は二小は勿論、町としても、大事業でありましたので、関係の皆様初め、ＰＴＡ、地区の方々が大変な努力と後援をなされました。学校側としても、滝先生時代の学校に名残りを惜しみながら、守山先生主任の花小金井分校と変り先生方が、文字通りの開拓精神を発揮したわけです。ツゲの大樹が移植、玄関正面に鎮座ましまし、二階からグランドピアノの音も響き、運動場には野球用バックネットが新設されるし、本校職員の羨望のまとになりました。

ここで、野球の好きだった、故柴山惣一校長先生を偲ぶことも、私達元同僚の役目と思いますが、ほんとに良い先生でした。友人と相談して私が、早期入院を申入れましたら、一度は承知されたのに？などと残念に思われてなりません。

四十年間の卒業生、父兄等を考えますと、私は未だ若輩かも知れませんが、今後の良き第二小の伝統を引継がれて益々発展されんことをお祈りします。

ひとこまの思い出

島田佳平

開校四十周年誠におめでとうございます。この四十年の間に数多くの卒業生を生み現に社会に進出、大いに活躍していることを思うとき、開校以来貢献されました地域各位の誠意ある御努力に対し心から感謝と祝福を申し上げます。

顧れば、私は昭和三十四年四月第八代の校長として就任爾来満五年即ち昭和三十九年三月末までお世話になったのであります。よって、丁度八分の一に当ります。くしくも又私の教育生活四十年の八分の一に相当するわけで、考えてみると、五年という歳月は、人生にとっては、ほんのひとこまとも思われますが私にとっては教育生活最後の学校でありますので思い出は　ひとしお深いものがあります。

昭和三十四年四月一日付を以て御　に赴任を命ぜられた時は第五小学校が本校から分れて新設されて間もなくのことであった。その後間もなく第七小学校がわかれるという、めまぐるしく発展した時代でありました。その間本校に於ては新校舎が二棟も竣工し学校給食も始められるし、若草学級の併設、校歌の出来たのも大きな思い出の一つです。その校歌が立派な額に納められ、校長室に掲げられていることも私にとっては生涯忘れることの出来ないことであるがここで一言申し置きたいことは立派な額縁に表装が又特別念入りで純金箔を使用し永久に変色しないというお自慢物で、その上、之が無償で贈られたという厚意も又忘れてはならない。

以上思いつくままに主なる事柄を拾い上げてみましたが、その一つびとつにいわれぬ思い出がこもっていて、今は遠い思い出も今目のあたりに浮び出て感慨無量であります。最後に関係各位から贈られた立派な兎の置物が私の家の床の間にあって、朝な夕な小平第二小学校の当時のこと柄を無言の中に呼びかけてくれております。

では先生方、御父兄の皆様おすこやかに。

二小の発展を祈る

椎名　恵之亮

四十周年のお祝いを心からお喜び申し上げます。二小は市の中央に位置し、村の時代から生々発展して来た郷土を、実に象徴していると思います。昔、熊野宮にあった村塾が次々と規模、校名、位置を変え、現在地に移ってからも、校地を再々拡張し、校舎は当初かぎ型平屋建てであったそうですが、増涙、改築で今のような複雑な形のものになりました。

私が赴任した昭和三十九年には、児童数九〇〇、学級二〇でしたが、四年間に児童数一一〇〇を越え学級数は二五となりました。この間にも学校周囲の有様は見る見る変化していました。私は、二小発祥の地熊野宮の空にそびえる大樹を学校から望んで、郷土の歴史をいつもしのんでおりました。

本年、一部近代的な校舎が完成しましたが、今後更に全面的に整備され、中央校としての面目を具現する日の一日も早いことを祈っています。そして、四十年の歴史の上に積み上げられた教育活動が更に磨かれ、郷土の期待にこたえてますます発展の途を進むことを祈っています。

吉田　実

菊かおるよき日に母校第二小学校に於て四十周年の祝賀会が行われます事を心より御祝い申し上げます。二小の思い出となると私の場合特別なつかしさを覚える。先生が立派だった事と根性をそだててくれた二小だったと思う。

その頃は今日より雪が多かった。生徒は全部着物（和服）で靴はなく皆下駄である。下駄の歯に雪がつまって素足で雪をふんで通学した事をおぼえている。

学校に着くとこんどは雪合戦だ。教室には暖房もストーブもないので自からの手で身体をあたゝめ勉強したものである。

又私達はよく先生の自宅などへ呼ばれ御菓子など御馳走になり「お前はこの点をのばせ」とか「こゝが悪い」とか人間的な指導を受けたものです。今思うに「先生」は学問だけ教えていればよいのではなく、それだけならば今日ではテレビ教育でもことたりる訳ですが、学校教育というものは「先生」「生徒」のふれあいの中に人間を育てることが大切と思う。

世界中文明の開けてきた今日ではいろいろの意味で世界のすみずみまでの人達と関連があるわけで、我々は陰に陽にこの人たちの恩恵をこおむっている。我々を育てゝくれた親の恩、親身になって教え導いてくれた師の恩、更には国の恩、

そして人類全体の恩、これらに酬いるにはいかにすればよいか。わたしたちはいつまでも絶ゆまず努力し自己を充実し世の為人の為自分の出来うる最大限の努力をする事ではないだろうか。幸い此の度地元有志のお力により同窓会が発足し、伝統ある母校が健全な校風を誇り益々発展するために最善の努力をしようと誓いあった次第です。

創立四十周年によせて

並木　盛義

私たちの母校小平第二小学校の創立四十周年を迎え、今更ながら歳月の過ぎ去る早さが痛感されます。「光陰矢の如し」とはよく言ったものだと感慨深いものがあります。

当時小平村であった本市も大正時代からは人口も漸く増加し始めて、昭和の時代に入ると、相前後して第一、第二、第三の三小学校とも校舎が不足になりました。

本校の敷地の殆どは元私の父の所有地を提供したもので、当時は周囲一帯が畑地で西は遠く富士の山を仰ぐことが出来、また奥多摩、秩父の山並を一望におさめ、近く熊野宮の森を望む広々とした景観で四季折々の風光はいまだに眼に浮かび懐しさに耐えないとこです。

初代校長先生の謹直誠実な人柄と、全校一体化の円満な運営は斉しく敬慕するところでした。体育も盛んで、現在七小の渡辺先生や池谷先生等の熱心なご指導を今も思い出します。東村山化成校での連合運動会で小平二小の実力を毎回示したことも懐しい思い出です。本校四十年の過去を回想し、時代の変遷推移を偲ぶと同時に、今日堂々たる校舎の偉容と幾多の施設・設備の整備拡充を見たことを心からお祝するとともに、開校以来四十年の輝く歴史と立派な伝統を持つ私達第二小学校の卒業生として、校長先生をはじめ恩師各先生のご薫陶ご指導に対して衷心より感謝を表したいと存じます。

終戦以来すでに二十年余、自由が進んできた反面には極めて複雑な社会相を呈している当今、かゝる社会環境の中で子どもに対する教育の並々ならぬむずかしさを痛感いたします。小学校教育は将来の日本を担う後輩達の人間形成の上に重

要な意義を有することを思うにつけ、この学校に学ぶ後輩が健全な成長を遂げるようにそれぞれ各先生方の適切なるご配慮とご指導を切にお願いする次第です。

四十周年

四ノ一　今井昌美
〃　首藤厚子
〃　佐藤ゆかり

二小は、今年で、四十年をむかえたのだそうです。
そこで、私たちは四十年前の、ようすを、調べてみようと、思いました。
むかしから　住んでいそうな人の家に、行って、いろいろ教えてもらいました。
四十年前に、学校が、できたころは、みんな、カスリの着物をきてゲタをはいて、白いきれでつくったカバンで、学校へ行ったそうです。
むかしは、今とちがって　すてきな、ようふくをきられないし、食べ物だって　いろいろな　しゅるいのものも　なかっただろうし、今の　時代に　生まれてとてもよかったとおもいます。
それに、自分の思ったことも、自由にできなかったし、こどもも、おとうさんたちの　しごとを　手つだわなければならなかったから、たいへんだったろうと思います。
そのころのこのへんは　毎年二月になると北風がつよく砂ぼこりで、まっかに、なるのがゆうめいだったそうです。
むかしは、家と家との間が長かったそうだから、あかいほこりがたったのを　見たけど、今考えて見ると、あんな事、ほんとにあったのかと、ふしぎに思います。
でも、今では、だんだんうちがふえて来たので、ほこりは、あまり立ちません。
ここに　二小がたったのは、四十年前だけど、二小は、もっと前からあったそうです。
それは、寺小屋と言って明治の初めに　できた　そうです。古い学校はそんなに前からあったのに、大正時代になっても　学校は、三つしかなかったそうです。
それから少しづつ人口がふえて来たので、今の所に　二小が　新しく　たったそうです。

寺小屋が　二小に　なると同じに、その　場所にあった　役場が　こうみんかんに　なったと言う事です。
役場とこうみんかんとは、中みは　だいたい同じだと聞いたのに、なぜ、わざわざ、名を　かえたんだろう
中みが同じならわざわざ名前をかえなくても、よかったと思います。
そのころは、ダンベイことばを　使っていたそうです。
今の私たちのことばとは、ぜんぜんちがいます。
私たちが調べに行って、よくおしえてくださった家は、たった二けんだけです。
あとほかの家の人は　みんなわからない人ばかりでした。
このへんは　よそからうつってきた人がとても　多いことがわかりました。
でも二けんだけでも　こんなによく教えてくださって　とてもうれしいです。
私たちは、むかしの事を何も知りませんでしたが、調べて見て、四十年前と今では、くらしもふくそうも、ことばも、ずいぶんかわって来ました。
むかしの人がいろいろ努力して　くれたのでくらしやすく　なりました。
だから私たちは　これからの二小をよくしていこうと思います。

四十周年をむかえて

四年二組　下　川　裕美子

小平二小が、四十周年をむかえて、本当におめでとうございます。
わたしたちは、この学校にはいって、まだ四年しかたっていないのに、その十ばいも前から、この学校があったなんて信じられません。
そのころの小平は、家もそんなにたっていなかったし、一ツ橋駅から学校が見えたかもしれません。

学校の生徒は、畑道を通っていたでしょう。
今では車も多く、学校へ行くにも大へんです。四十年の間にこんなにもかわって、今は、新しい校しゃもできている。
一年生の教室には、おとうさんやおかあさんのすわったいすもあるかもしれない。
だんだん新しい校しゃが出来ると、むかしのおもかげがなくなっていく。
けれど小平が発てんして、生徒がふえてくるのだから仕方がない。
わたしたちも、いっしょうけんめい勉強して、りっぱな二小の生徒であるように、がんばります。

四十周年記念

四年三組　綾部　みどり

私たちの学校は、生れてからもう四十年、うちの父といっしょに生れた、少し年をとった学校。
私は、運動会が、大きらい。ところが、四十周年大運動会は、なぜか、とてもたのしかった。ときょうそうで、いっしょうけんめい走った。おうえんも大きな声で、した。とても楽しかった。
それに　私の作文が　新聞にのったり。児童委員にえらばれたり今年は、私にとっても記念すべき年だと思う。
四十年前は、小さな教室で、勉強したそうだ。でも今は、三かいだての校しゃが出き、体育館も建てられるらしい。
ふつうの人間なら、年をとれば、とるほどよぼよぼになる。でも二小は、だんだんりっぱになる。これからも、うんとはってんしていって、りっぱになるといいなあと思う。

四十周年記念

五ノ一　高橋　千晶

私達の学校は、今年は、そう立四十周年で、十一月十七日記念の式をすることになっています。私は、四十年前に私達の学校が出きたということを聞いたとき、なんだか昔物語を聞いているみたいで、今から四十年前の小平はどんなふうにあったのかと思いました。　お父さんが「昭和二十九年に小平に来たときは、畑ばかりで、夜などとてもさびしくてこわいくらいでしたよ」と言っていました。

学校のできたころは、テレビに出てくる本当のいなかであったと思います。一番初めに卒業をした人から、そのころの話を聞いたらどんなにおもしろいだろうと思います。

私は今まで、私達の校舎は、新校舎を別にして今までの校舎が古くさくて、区内のほうの校舎がコンクリート造りであるのを見て、ほんとうにいやでした。けれども、お父さんから人間にたとえると新しい学校や校舎は、赤ちゃんで、古い学校や校舎はお母さんみたいなもので、私達の学校は、今まで四十年もの間、新しい一年生の赤ちゃんを生んでいっしょうけんめいに勉強を教えて卒業さしてくださって、この人たちは今では皆りっぱな人になり、一番最初に卒業した人は、お父さんより年が多くて五十をこしたといわれます。小平市は、私達の学校を卒業した人達がほとんど中心となってかつやくしているということを聞いて、私は反対に私達の学校がなによりもたのしくなり、ほんとうに誰にもじまんしたい気持ちです。

私は、小平で生まれたので、きっといつまでも今と同じであったらいつまでも思い出が残っていて私が大きくなったとき、どんなにかうれしいだろうと思います。けれども、そのとき私がりっぱな人になっていないと、はずかしくて学校を見にこられないと思いますので、これからいっしょうけんめいに勉強をしていこうと思います。

二小四十年

五ノ一　小峰　美恵子

ふようの峰に空晴れて
生気あふれる武さし野に
ひときわ高きまなびやは
これぞ第二の小平校

この歌は、三十年ほど前に、できた校歌だそうだ。

お母さんは、時々この校歌を歌うことがある。お父さんもお母さんも、二小の卒業生だ。だから二小の思い出話を、時々してくれる。春は、学校全体で、学芸会を開き、秋は、三小までが合同で、学園のグランドで、大運動会を開いた。何も楽しみのなかった農村では、一年で一番の、行事だったそうだ。

二小の付近は、家もなく畑と林が、見わたす限り連なり、静かな校庭には、小鳥がさえずっていたそうだ。わたしには、そんな話を、聞いてもそうぞうが、つかない。

お母さんが、小さいころ大きな、台風が来て校舎が、たおれそうになり、村人たち全員でつっかえぼうしたと、言った。それで、一年の時、ふしぎにおもったつっかえぼうのことが、わかった。

授業の合図も昔は、鐘だったのが　今では、チャイム、すごい差だ。

新校舎が建ち、テレビがある二小。これで体育かんとプールができれば……。

と、いつも考える。

古い校舎は、四十年間風雨にさらされながらだまって建っているけれど、たのしい事も、かなしい事も何でも知っている。

わたしは伝統を持つ二小に入学できて良かったと思う。

四十周年をむかえて

五年　村崎　恵子
五年　吉田　多恵子

吉田　私達の小平第二小学校は、今年で四十周年をむかえるのね。

村崎　人間で四十才といえば、頭にぽつぽつ白ががはえてくる年令ね。私の母は、四十の声を聞くと、めっきり白ががふえて……と、よく人に言ってるわ。でも、二小は四十才で新しい鉄筋の校舎ができ、古い校舎もだんだん新しく建てかえられるんですってね。

吉田　人間とはぎゃくに、若返るってわけね。

村崎　体育館やプールができると、雨が降っても体操はできるし、夏はみんな真黒になって泳げるのね。想像しただけで楽しくなるわ。

吉田　でも、そのころの私たちはもうこの二小にいないのよ。だけどりっぱな音楽室で器楽を習ったり、いろんな教具を使って新しい教育を受けている私達は幸せね。わたしの父も二小の卒業生だけど、父の小学生時代は校舎は北側と西側に面してカギ型になり、ぜんぶ平家だったそうよ。それに小さな足ぶみオルガンしかなかったんですって。生徒は、かすりやしまの和服を着て、教科書をふろしきに包み、今のように便利なランドセルをしょってる子供はいなかったのよ。お勉強だって、読み書きだけが中心だったらしいのよ。

村崎　それを思うと私達は幸せね。だけど、もう少しおそく生まれてきたかったわ。

吉田　なぜ？

村崎　だって、体育館やプールができるころには、私達もう二小を卒業してるんですもの。

吉田　そうね。でもこうはい達のために喜んであげることにしましょうよ。

村崎　ええ、そして私達はあと一年半をしっかり勉強して　先ぱいの残していった二小のよい伝統を、ますますよいものにするようにがんばりましょう。

吉田　がんばりましょう。
村崎　二小さん、四十才のお誕生日
吉田　おめでとう・・・・。
村崎　おめでとう。

四十周年きねんをむかえて

四ノ五　三浦　紀子

わたしは、転校生だ。だからまだ学校のことをあまり知らないので、四十周年と言われてもぴんとこなかった。わたしがこの学校に入ってきておどろいたのは、ボロ校しゃだった。わたしは、いままで、てっきんのきれいな学校にいたのに、ゆかは、ガタガタしているし、かいだんをのぼりおりすると、ギイギイ音がして、気が気でない。

でもわたしは、思いちがいをしていたのだ。この学校は、四十年もの歴史があったのだ。せんそう中いやその前からたてられていたことがわかった。そのことを聞いてからこの古い校しゃもなんだか美しく見えてきた。せんそうの時しんだ子どもがいただろうか。せんそうにまけて、かなしさのあまりないた人もいただろうかといろいろ考えてみた。このゆかいたに何千人の人の足あとがのこっているのだろう。わたしもこの校しゃにたくさんの足あとをのこしているのだ。

わたしは、ときどきこんなことを考える。あたらしいプールや、てっきんの校しゃや、体育館、飼育小屋や、エスカレーターがあったらどんなにすばらしいだろう。でもわたしが十年ぐらい後にきたとき、わたしのまなんだ教室がなかったらどんなにさびしいだろう。と思うと、いつまでも古い校しゃがのこってほしいような気もする。わたしには、どちらがよいのかわからなくなってしまう。

いつかは新しい校しゃにかわってしまうだろうが、小平二小は、五十年いや六十年百年までもつづいてほしい。

四十周年記念

六年一組　前山　木の実

わたしは、去年の四月、五年生の始めに北海道から二小に転校して来ました。東京へ行ったら、学校は、きっと近代的なすばらしい学校だろうな、と想ぞうして来たわたしのゆめは、二小を見たしゅんかんにこわれてしまいました。その時の学校は、見た目にも古くて昔ふうでした。さいわいわたしの教室は、新校舎でよかったのですが、一年生に入学した妹の教室は、おトイレのそばで、妹は、いつもいやなにおいがするといっていました。でも中にいるおともだちは　明るいよい人ばかりでした。

聞くところによると、この学校の歴史は、今年四十年にもなるそうです。ちょうど四十周年記念のとき六年生になったということは、とてもうれしいことだと思います。

先生が、二小へ来たときのことを、話してくださいました。

先生が七年前に学校へ来たときは、家が、少ししか建っていなくてみわたすかぎり畑だったので、富士山のすそまで、校庭から見えたそうです。

わたしは、富士山のすがたを、思いうかべながらそのころは、きっとすばらしい風景だったんだろうなあと思いました。

今、のきなみに続いている家々や、お店屋さんを見て、世の中の移り変わりを、しみじみ感じます。生徒もふえて来ました。それにつれて、学校もだんだん新校舎がふえて来ました。そのうちに、きっと全部新しくなって、りっぱな二小になることでしょう。

わたしたちの二小が、ますますながい伝統を受けついでさかえていくことを祈ると共に、二小の卒業生というほこりをもって、毎日をすごしたいと思います。

四十才の二小

六年三組　萩原葉子

小平二小が生まれてから、四十年という　長い年月が流れた。
大きくてりっぱな、新校舎にかくれて、ひっそりたっている旧校舎
ゆかを　ふみしめると　ギシギシ鳴って、風が、ガラスにあたると　カタカタ鳴る。
今では、ぼろぼろになってしまった旧校舎も、四十年前には、あるいはもっと前のことかもしれないけれど、私たちのような子どもといっしょに勉強をしたり遊んだりしたのだろう。
四十年の間に　この旧校舎は　どれだけの子どもを　送り出したろう。
長い年月のあいだに　新校舎がたち　花だんができて　きれいになった二小
これから　どんな学校になるだろう。
これから、どんな子どもが入学するだろう。
あとわずかの二小の生活
あらゆるなやみや　うっぷんを　ぶっつけて、みんなすいこんでくれた校庭
あと少しの二小での生活をがんばろう。二小の友だちといっしょに　楽しもう。わらい合おう。
そして　これからの二小を　私たちの力でりっぱにしてゆこう。

四十年きねん

六年　楠田淳子

四十年というと、うちのおとうさんは、まだ赤ちゃんのときです。すごいんですね。なんか　しんじられません。私は小平二小を　たのしくしたいと思います。
私たちのせんぱいにも、よろこばれたいです。
四十年きねん・おめでとう　ございます。
私も　もうすぐおわかれです。うちの　ひろみも　若草学級にはいりたいと　いっていました。

私は、なんだか、もう一年いたくなりました。とってもいいところでした。でも、もう、四十年になるなんてしんじられません。

四十年きねん

五年　福井　利一

四十周年記念小平第二小学校

ぼくのおとうさんは大正十四年十一月生まれです。おかあさんより早生まれです。小平第二小学校をよく知っています。おとうさんは並木さんを知っています。並木さんも、二小のそつぎょうせいだそうです。若草学級が生まれて八年めです。ぼくが生まれていないときは少しも平和がなかったです。昭和十六年に太平洋せんそうがありました。おかあさんが昭和六年六月に生まれました。小平第二小学校がうまれてる年めです。二十年にせんそうがおわりました。ぼくたちはうんとべんきょうしていくようになります。小学校をそつぎょうし、中学をそつぎょうして高校をそつぎょうして大学をそつぎょうしてりっぱなおとなになります。

四十年きねん

六年　亀井　福代

四十年きねん。まだ、おとうさんも、おかあさんも、赤ちゃんも、うまれて、いないときに学校が、できたとおもいます。できあがって、おとうさんも、学校に、はいったとおもう。おとうさん、おかあさんに、まけないように、私も、がんばります。

沿革・年表

年	国の動き、世界の動き	思想、教育関係	市の歩み	二小の歩み
大正一四 一九二五	普通選挙法制定、治安維持法	→ (童謡，詩，自由，鳥い赤) 自由主義教育 ←		
昭 二	ジュネーヴ軍縮会議、金融恐慌		西部電車開通（高田馬場―東村山）	
〃 三	第一回普通選挙、山東出兵	国定教科第三期（市民・公民のモラル）	西部電車・多摩線開通	第二小平尋常高等小学校開校
〃 四	世界不況		昭和病院焼失	
〃 五	ロンドン海軍々縮会議、金解禁	左翼教育、教員俸給不払	人口、六五五八（十月一日）	
〃 六	満州事変、金輸出再禁止		津田塾小川に移転	
〃 七	五・一五事件、上海事変、満州国誕生	国民精神文化研究所		野中新田与組に分教場設置
〃 八	ナチス政権をとる、日本国際連盟脱退、米穀統制法制定	京大滝川事件 国定教科書第四期改訂	商大予科小川に移転	
〃 九	ワシントン条約破棄			
〃 一〇	天皇機関説問題		東京府指定、特設青年学校校舎完成（小川）	
〃 一一 一九三六	ロンドン軍縮会議脱退、二・二六事件、ドイツ フインランド侵入	教育へ → 教学刷新評議会	多摩済生病院設立（大沼田）	
〃 一二	日華事変、第一次近衛内閣成立	義 「国体の本義」出る 国民精神総動員実施要項		

昭一三	中国全土に戦争拡大	国家総動員法（愛国行進曲・国民進軍歌）	軍国主		
〃一四	食糧危機、米穀配給統制令、物価急騰	国民徴用令 青少年学徒に勅語			
〃一五	新体制、政党・労組解散 隣組制度完成、日独伊三国同盟	「臣民の道」出る 国民生活新体制要項		国勢調査 人口、八六七四（十月一日）	
〃一六	第二次大戦起る、独ソ開戦、日ソ中立条約締結	戦陣訓、国民学校全高専卒業四月くりあげ、第五期教科書改訂（皇国民の錬成）	育教戦聖・義主家国超へ	蚕糸科学研究所 小平養蚕所設立（小川）	東京府北多摩郡小平第二国民学校と改称
〃一七	東条内閣成立、衣料統制（切符）食糧管理法	高専卒業六月くり上げ			
〃一八	イタリヤ降伏	戦時国民思想確立に関する基本要領 大学・高校卒業一年短縮、学徒動員		都制施行。小平村東京都に編入	東京都北多摩郡小平第二国民学校と改称
〃一九	本土空襲始まる	学童疎開、決戦非常措置法、女子挺身隊勤労全学徒動員数二九〇万		小平町制施行	
〃二〇 一九四五	終戦、民主改革はじまる	歴史、地理、修身の禁止		人口調査 一三五六八（十月一日）	

昭二一	天皇人間宣言、新憲法制定 公職追放、食糧危機 男女平等、初の総選挙 第一回食糧メーデー、 農地改革法	←民主々義教育の徹底→	アメリカ教育視察団	恵泉女子学園 鈴木新田に移転
〃二二	新憲法施行、農地改革に着手、財閥解体、二・一ゼネスト禁止		教育基本法制定 新制小・中学発足＝男女共学となる。 社会科誕生、日教組結成	小平中学校、青年学校々舎に開校 小平町消防団設立
〃二三			新制高校発足 教育委員会（公選）発足	警察学校、小川新田に関校 小平霊園開園
〃二四			新制大学発足、ユアカリキュラム	小平中学校々舎落成 鷹の台駅営業開始
〃二五	朝鮮動乱起る、警察予備隊発表			国勢調査 人口二二、六七五（十月一日）
〃二六	講和条約締結、安保条約締結、破防法成立		指導要領改訂	
〃二七	講和条約発効、日本独立 血のメーデー		市町村教委発足 社会科問題（地庁分離） 山口日記問題	熊谷組野球場 小平学園に開設 小平第三小学校増築落成
〃二八	朝鮮動乱休戦			
〃二九	警察法、防衛二法成立	←民主主義教育反省期→	教育二法成立	都立小金井公園開園
〃三〇	砂川基地斗争			国勢調査 人口二九、一七二（十月一日）

	小学校令施行により、東京都北多摩郡小平町立小平第二小学校と改称	
	分教場を分校と称する。第一次校庭拡張（一、三二八坪）	創立二十五周年記念式典
	新校舎（南側平家二棟）落成 第二次校庭拡張（七一五坪）	

昭三一		教育委員会制度改正（任命制） 教科書検定、愛媛勤評	小平一小分校、第四小学校として独立	小平二小分校、野中に落成	
〃三二	ソ聯人口衛生打上げ	勤評論争はじまる	二小分校五小として独立。小平中分校二中として独立	二小六教室（中央二階建）増築落成	
〃三三	警職法改正	教育課程指導要領改訂 道徳教育登場	尺貫法、年末で廃止 日立武蔵工場操業開始		
〃三四	皇太子ご成婚		ブリジストンタイヤ東京工場操業開始	改築校舎（北東二階建）落落	
〃三五 一九六〇	安保条約改訂		国勢調査 人口 五二、九二三（十月一日）		
〃三六		国立高専発足	一中分校、第三中学として独立、武蔵美大開校	校歌制定、校旗制定	
〃三七	キューバ危機、貿易自由化	人づくり 発足 文部省学力テスト実施	市制施行	二小分校開校（大沼町） 特殊学級開級	
〃三八	ケネディ大統領暗殺さる	新らしい教育の展開	都立小平高校、錦城高校、それぞれ開校 小平郵便局開局	二小分校・第七小学校として独立 市制により東京都小平市立小平第二小学校と改称	
〃三九	オリンピック東京大会		北多摩北部事務所開所、第八小学校開校 電報電話局開局	一中特殊学級（新設）へ、教室貸与、給食実施	一

昭四〇	ベトナム戦争激化	―うな伴に展発済経―	〃期待される人間像〃出る	北多摩中央消防小平出張所仲町へ移転 九小、四中、十小開校	第九小学校開校に伴い児童移籍
〃四一			中教審後期中等教育中間発表	都立小平保健所開所 小平・大和・村山ごみ焼却所完成	南校舎東半部（鉄筋コンクリート三階建）工事落成
〃四二		←経済発展に伴なう―		十一小開校、小平駅前広場造成始まる	南校舎西半部工事完了 音楽クラブ NHKコンクール多摩地区優勝
〃四三				教育課程、指導要領改訂	理科研究発表会 音楽クラブ多摩地区代表として、東京中央音楽大会に出場（文化会館）

ＰＴＡの歩み

書記　張江　庸直

四十周年を迎えるにあたり、父母（ＰＴＡ）の歩みについてとの依稿をお受けしたものの、当校に赴任してまだ七年目にしかならない私が、とても全ぼうを正確に表現出来るはずはありません。ただ、いろいろな記録をもとにして、私なりの思考を進めて参りたいと存じます。

本校ＰＴＡ（正確には、小平第二小学校父母と先生の会）が発足いたしましたのは、昭和二十五年四月十六日、初代会長さんには、吉田岬楽氏が就任されました。当時は、インフレにつぐインフレと食糧難時代で、小平には、現在の六分の一の人口ぐらいの二一、六五九人しかいなかったということです。今の鉄筋校舎の建築の為に南半分を切りとられた西側の古校舎の一棟では、とても全児童を収容することが出来ず、二十六年に現在の一年生が入っている校舎が増築されたのですが、どこかの兵器工場跡の古材を使ったとか、とにかく、いろいろなご苦労があったことと思います。二代目大久保会長さんの時に、始めて児童数千人の大台を破り、昭和三〇年、三代中野会長さんの時代には、四学級の二部授業を実施しなければならなかったようです。四代福井会長、五代鈴木会長の時代へと、児童数は、ぐんぐん増加していきましたが、児童数の増加は、即ち教室及び環境整備につながる問題として、校舎の増築につぐ増築で、当時のＰＴＡの方々は、幾多のご苦労があったことと存じます。三十二年に第五小学校が分離独立し、次に、北側、中側の二階建校舎が増築されるに及んでも、六代目佐藤会長時代（三十五年）には、現在の公民館分館で、二部授業をしなければならないような状態でした。そして、七代目岩淵会長時代には、三十七年四月、第七小学校が分離独立し、まさに、増築につぐ増築と、二部授業、分校独立という教育環境の面では、最悪の歴史をくりかえしているような状況でしたが、小平市の人口も、ＰＴＡが発足した二十五年から三十五年までの十年間に約三倍の五

万三千人余りになってきました。三十八年の荒武会長、三十九年の岡田会長時代になるにしたがい、古い伝統を生かしながらも新しい時代の波が、ＰＴＡの運営の中にも見えてきました。規約の改正をすると共に、単なる後援会的なものでなく、自主的な社会民主団体としての会員相互の活躍もされるようになり、その意味では、大きく変革の道に一歩ふみ出したものといえましょう。新しい学校が、どんどん小平の青空にそびえ立っていくのと対象的に、古い歴史のある学校は、古い校舎、傾きかけた教室で学習を続けている子供を見るに見かねて、新校舎建築の気運が、期せずして、陳情に、請願運動に、あらわれてまいりました。そして第十代吉田会長に代表される、幾多の難しい問題をのりこえての運動の結果、現在の鉄筋校舎の完成となったわけであります。然し、新校舎のすぐ北側には、古い教室が立ちならび、その姿は、現在の小平市の持つ大きな悩みを表現しているようです。

四十年　第九小学校が分離独立したあと、現在の第十一代高橋会長に入いるわけですが、この学校のもつ悩みを解決し、四十周年記念という大切な年を記念し、大きく前進すべく父母、地域が共に立ち上がって、今熱心に活躍中であり、心強い限りです。

ＰＴＡの歴史、それは、時代と共に、こどもと共に、それぞれの時代を真剣に生き抜いてきた、大きな足跡のような気がいたします。

編集後記

輝かしい創立四十周年の記念に、みなさま多数の方々から貴重な原稿をいただきまして、まことにありがとうございました。

厚くお礼を申しあげます。

おかげをもちまして、本誌によって本校四十年の歩みが手にとるようにうかがわれます。

このさゝやかな記念誌が、幾多の卒業生、現に本学に学びつゝある千二百有余の児童ならびに、その父母、教職員の心を、より深く結ぶきづなともなれば、幸いこれに過ぎるものはございません。

これを契機に、すべての人々の力を結集して、本校発展のため、いちだんの努力をしていきたいものと考えています。

昭和四十三年十一月十日　印刷
昭和四十三年十一月十七日　発行
発行者　小平市仲町三一〇番地
小平市立小平第二小学校
印刷所　豊文堂タイプ